
-DICE GAME-

味醂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- D I C E G A M E -

【Nコード】

N 8 6 5 2 W

【作者名】

味醂

【あらすじ】

- C A U T I O N -

このページにお越し頂、誠に有難うございます。

この小説はHUNTER×HUNTERの二次小説です。

過去の記憶があやふやな女性がこの物語の主人公です。

夢の中で、過去の記憶が蘇ったり未来に起こる危機的映像が

映し出されたりします上、

何人にでも化けられるという主人公の特質上、

話の展開がややこしくなる可能性が危惧されます。

また、途中箇所で過激な性的描写やグロテスクな場面も

出てくる予定がありますので閲覧の際は以上をご了承ください。

それでは。

01 - MICHELLE - (前書き)

このページにお越し頂、ありがとうございます。 - 01、02 - プ
ローグ及び、第一部、第二部ではゴン達ビッグ4は出ない予定で
すので、先に忠告致します。おそらく第三部もしくは第四部のハン
ター試験編でやっと出会いますが、まだまだ先ですので期待しない
てください。

バツと目を見開いて、荒い息を整える。

忌々しそつに眉間に皺を寄せると、むくりと起き上がった。

全く．．朝から夢見が悪い．．．

手の甲で額の汗を拭い、ついでに顎へと滴るじめつとした水滴も拭い去る。

しばらく呆然としながらも、心なしか室内の空気が熱いと感じてああ、もう昼頃なのかと気がつく。

だるい腰を動かして、ベッドから降りた。

とりあえず、ほてった頭を冷やしたい．．と、水を求めて冷蔵庫を開ければ

中身は空だった。

チツと舌打ちをして、汗ばむ背中を掻きながら、今度はまっすぐシャワーを

浴びに浴槽へ向かった。

金の蛇口をひねり、身体に当てずにそのまましばらく流させた。

最初の水は冷たすぎるのだ。

ようやく、いい感じになったシャワーを頭からかぶり、ついでにとばかりにシャワーの水をがぶがぶと飲む。

キュツという音を立てて蛇口を元にひねり戻した。

バナナ色の髪を両手で絞って水気をきる。

やはり、シャワーはいい。大好きだ。鼻歌まで歌ってやる。

来た時と同じ、一系まとわぬ姿でバスマットに足を踏み入れ鏡に映った自分の姿に僅かに口角を上げる。

手近にかけてあったバスタオルをさっと手にし、髪を乾かしながらリビングに戻る。

そろそろガタがきそうな古い蓄音機の針をレコードにかけた。もう、いつぶつ壊れてもおかしくないのだが、それでも捨てられずにいる。

古いものには、どうしてだか愛着がわくものだ。たとえ、それが一週間前に拾ったものだとしても。

軽やかに流れるジャズとハミングしながら、コーヒーマーカーのスイッチをつけた。

シャワーを浴びる前につけるべきだったのだが、毎度忘れてしまう自分をくたまに呪い殺したくなる時がある。

生憎、今日はその日ではない。

そう自分に言い聞かせながら、また無意味に冷蔵庫を開けようとしたり手を止める。

．．．なにか匂う．．．

なんだろうか．．．

そう訝しげに思い、ガスコンロに近づいた。鼻をひくひくさせて、匂いの出所を探す。

．．．違う、そういう”匂い”じゃない．．．これは．．．

ピンと来た時には、窓ガラスはもう割られていた。
と同時に、キツチンの床に伏せて、すぐさまシンクの下の引き出し
を開けて拳銃を
二丁取り出す。

この際、自分が何も着ていないことなど、忘れるしかない。
ダダダダ．．．という不快な機械音と共に粉々になる食器類、淹れ
たてはやほやのコーヒーの
汁が床に飛び散ると、チツと舌打ちをする。

コノヤロウ、俺様の我慢を．．．

ふうつと息を吸って、弾かれた様に立ち上がり招かれざる訪問者を
発砲する。

眉間に皺を刻み、裸体を惜しげもなく披露した果てに見たものは、
ポンと放り込まれた丸い物体．．．

とつさに、それをキャッチし前方に投げ込む。
それをあざ笑うかのような二度目の投下。

クソッ！．．．間に合わない．．．ッ！！

ヒュッというたとえ様のない、部屋中の空気を吸い込んだような音
が静寂を切り裂き、
爆音が轟く。

私は、最後まで生への執着を離さなかった。

やられてみれば、突然の襲撃を受けたことよりも
体の半分が焼け焦げ、片目を覆う肉が溶け落ちても
まだヒューヒューと息をしている自分が何よりも恐ろしかった。

もう片方の目玉をぎよるぎよると動かし、やってくる気配に
ぴくりと指を動かす。

何も見えない、何も聞こえない。

ぐちゅり

聞こえたとすれば、そんな音だ。

胸の辺りを刺し抉りだされても尚、私は生きていた。

何も動かない思考の裏で、知らないはずだった、もう一つの”今朝”
の情景が蘇る。

開け放たれた曇りガラスのドアから、暖かな湯気が部屋に流れ込む。
部屋の隅で、古いレコードがくるくると回り、
ビートルズのミッシェルをカバーする女性シンガーの声が低く流れ
た。

絨毯の上を白いカーテンから漏れた陽光が、風に揺れるようにスイングしている。

. . . Michelle , m a b e l l e

S o n t d e s m o t s q u i v o n t t r e s b i
e n e n s e m b l e

T r e s b i e n e n s e m b l e . . .

後には、ミッシェルを呼ぶ女性の低く柔らかい声と、時々、キュル
ルという機械音を
漏らすレコードが、存在を亡くした主人に語りかけるだけ。

. . .
.
.

ハッと息を吞んで、飛び起きた。

だらだらと汗を流していることは、この際どうでもいい。

”今”がいつで、どこまでが”今”なんだ．．．?!

今まで起こったことは、いつの自分に降りかかるものなのか…

そして、今の自分がどの”姿”になっているのかも問題だ。

確かめるように、髪を撫で付ける。長い髪が肩をさらりと流れた。サツと薄暗い部屋を見回し、部屋の隅にある小さな黒い物体に目を凝らす。

あれは……

その黒い物体が蓄音機だと気づくのに時間はかからなかった。私の思考がひとつに収束し、すぐさま行動に移す。

一刻も早くここを出なくては…！

姿かたちを変えようかと思ったが、それは思い留まることにした。なぜなら、私にはもうあのアルファロメオしかなかったからだ。特徴のある車だ。顔を変えたところで、すぐに足がつく。

クローゼットからネイビーブルーのスリットワンピースを鷲づかみし、

頭からするりと体を通し、先を急ぐ。

勿論、”コレクション”も忘れない。

薄暗闇の中、蓄音機の前で手をかざすと、どこからともなく見開きの本が浮かび上がって

パタンと閉まる。そして、本も蓄音機も跡形もなく消えた。

何事もなく、玄関脇の座椅子に無造作に脱ぎ捨てられた黒いレーザージャケットを肩に掛け、真っ赤なハイヒールを足に引っ掛けるようにしながら部屋を出る。

行く当てなんて、ドライブしながら夜風に吹かれていればそのうち見つかるだろう。

そんな軽い気持ちで手ぶらのまま階段を駆け降りた。

私は、エレベーターをなるべく使わない。

いや、使いたくないのだ。

こんな夜に一人で乗るなんて正気の沙汰じゃない。

間違いなく、軽くちびるだろう。保障する。

そんなどうでもいいことを、不特定多数の人民に保障している間、

いつのまにか愛車の前まで着いてしまった。

愛車といっても、まだ三日の付き合いしかない、ファーストフードをテイクアウトするくらいの短い歴史なのだが。しかしそれも、今夜で終止符を打たれてしまっただろうか。まあ、仕方ない。

さっと、手のひらにキーを”召還”してドアを開き乗り込む。

発進と同時に、オーディオのスイッチが入った。

BONJOVIの”TWO STORY TOWN”が小気味よく流れる。

ハンドルをリズムよく叩きながら、夜闇を駆け抜ける。

オープンカーの醍醐味。気持ちいい夜風が髪をなびかせる。数時間後には、私がいた部屋は盛大に爆破されるだろう。

「あばよ、クソつたれども」

勝ち誇ったように、そうほくそ笑みながら何気なくバックミラーを確認する。

4時と8時の方向の曲がり角から、黒い車が何台か連なつて近づいてきた。

こんな夜更けに逢引かよ・・・と毒づきながらエンジンを上げて急発進させた。

ストーカー軍団も速度を上げて横につけようとする。

… けっ、俺様のよこにつけようなんざ百万年早いね！

ストーカー軍団の前方三台の窓ガラスが開くのを確認すると、私は愛車に向かって声を掛けた。

「おい」

ダダダダダ…というお馴染みの射撃音。

生憎、この車の防御は完璧だ。追撃者たちは、撃てども撃てどもタイヤをパンクさせるどころか車に傷一つ当てられずに躍りになっている様子だ。

いや、なによりもオープンカーだというのにいくら撃っても弾が私の頭部を

掠りすらしないのである。おそらく、発狂しているに違いない。後方で罵声が聞こえた。ざまあみろ、だ。

「おい、貴様聞こえてんだろッ」

再度、怒鳴りつけるように愛車に呼びかけると、アルファロメオは、さも面倒くさそうにライトを点滅させた。
…了承したと受け取っておこう。

「ちょっと、運転かわれ…」

そう言うが早いか、ぱつと振り返り座席に肩ひざを乗せて立ち上がった。

先手必勝。

ニヤリと不適に笑う私の右肩には、巨大なバズーカ。

「あーばよ」

爆音が轟き、夜の闇に真っ赤な火柱が立った。
爆風が髪の毛をむちゃくちゃに荒らす。

「あっはっは！」

乱れた前髪を手ぐしでかきあげて、そのままハンドルに腰を下ろしてこの美しい爆炎を脳裏に刻み付ける。悪い気はしない。非常にハイな気分だ。

右手にライター、左手に紙タバコを召還し、火をつける。

アヘンを染み込ませた、最高に感度のイイヤつだ。

すーっと、冷たい空気が脳天まで染みわたる様。たちまち、喉が胸がそして主に下半身が、
熱くなってくる。すこぶる調子が良い。

ピルルルル・・・と、携帯が鳴った。

相手の名前を確認して電話に出る。

「あんだよ?...、へいへい」

二つ返事でそのまま切った。今夜の行く当てができた。

オーディオの音量をMAXにして、鼻歌混じりで目的地へ向かう。

ジジ…と、タバコの灰が膝に落ちて飛び起きた。
いつの間にか寝ていたらしい。

ささつと膝の上の灰を払い落として、小さくなったタバコを握りつぶして捨てる。

カランカランと乾いた音を立てて、ドアが開いた。

「… 閉店だ」

二階の階段に腰を下ろしたまま、気だるそうに言い放した。
しかし、小さなお客さんには言葉が通じなかったらしい。

肩で荒い息をし、尚もそこに突っ立っている。

眠くて重たい頭を少し上げて、ちらりと視線をやる。

高潮した頬に、目にいっぱい涙を滲ませ堪えている。

「はぁはぁ…、せん、せい…ッ！」

実にエロイ台詞である。

放課後の愛の告白だとか、年の差カップルだとか、
先生と生徒との禁断の恋愛だとか、しかし、そういう甘酸っぱい展開にはならなさそうである。

はぁ…と頭を掻きながら、少女に背を向ける。
もう少し堪能しても良かったのだが、俺はまた一つフラグとやらを消してしまった。

「せんせい！おねがいっ！！」

懇願するように叫び、引き下がらない少女を適当に片手で制して階段を上る。

非情だろうか…、そうでもない。

「…おい」

二階の真ん中に、でんと構える巨大なテーブル。
その上を横たわる巨漢に声を掛ける。

「起きろッ、このっ！」

ガツと、やつあたり半分にテーブルを蹴りつける。巨漢の眉がぴくりと動く。

「…起きろってんの」

テーブルに飛び乗り、巨漢の大事なところを踏みつけた。ぐりぐりと…

「はッあッーーーー！！！！」

巨漢は飛び起き、くの字に身体を折り曲げた。今にも、ぺしゃんとつぶれそうな勢いである。

「治してやったんだ。誠意…見せろ」

新たなタバコを召還し、火をつける。
ぱはーっと旨そうに煙を吐き、尚も苦しそうに呻いている巨漢を見

下ろす。

「うつ…はあはあ…、ボスがもう振り込んで、るだろうつ…っ」

禿げた巨漢のあえぎ声ほど気持ちを萎えさせるものはない。
ぱつと携帯を取り出し、確認する。

8の後にゼロが9個並んでいる。まあまあ、といったところか。

俺は、つけたばかりのタバコを奴の寂しい頭に押し付けて火を消した。

「まいど」

俺はテーブルを飛び降り、元来た道を戻った。怨念のこもった視線を背後に受けながら。

俯いていた少女が、階段を下りる音を聞きつけて顔を上げた。

俺の顔を見るなり、ぱあつと表情を輝かせ、その目に生気が宿る。

お嬢さん…10年後にまた会おうじゃないか…

そんなことを薄らばんやり想いながら、足早に少女に案内されるがまま

薄暗いスラム街を闊歩した。

子供たちが路地裏に集まっていた。

背景の雑多としたゴミと溶け込むように、覇気がなく物と化している。

一人の少年が俺の方につつろな目を投げると、関心を失ったかのよう

にまた皆と同じ方を向き直った。

その先の曲がり角を曲がると、酷い腐臭がより一層強まり

俺は思わず歩を止めた。

「あの子は…？」

案内をしてくれた少女が子供たちに問いかける。

「チーリヤン…」

茶髪の女の子が悲しそうに振り返る。”チーリヤン”と呼ばれた案

内人は、

静かにその輪の中心へと歩みだした。俺も無言でその後へ続く。

子供たちが俺をなんとも言えない強い視線でジッと見つめ、仰け反るように道を空けた。

恐怖、憎しみ、怒り、悲しみ…そして、僅かな動揺。

様々な感情を俺は一身に受け、俺はチーリヤンが歩を止めて見た先を背後から覗いた。

それを見るなり俺は、思わず息を呑み、眉間の皺を深く刻ませた。そこには、所々破れたボ口雑巾にしか見えないものを身に纏った、

小さな子供が横たわっている。この酷い腐臭はその子からだった。

「…出て行け」

俺はボソツとそうつぶやくと、その小さな子供に跪いた。年齢は、4歳か5歳だろうか。

彼女のありえないところから薄く煙が出ていた。下半身、否、厳密に言えば性器から煙が漏れ出ている。

煙の原因は、この耳障りな、…酷く耳障りなバイブ音が全てを物語った。

それは微かだが、紛れもなく彼女の幼い膣から聞こえてくるのだ。おそらく、強制された性行為の果てに、”玩具”が膣の奥に入り込み、

そのままほったらかしにされたのだろう。

しかし、それがまだ動き続け、中でオーバーヒートを起こしていることが

目先の大問題だ。

痛い、苦しい、ツライ、なんていうものではない。

クソツ・・・たれ　！！

俺は、吐きそうな程に憎憎しい思いをぐつと堪えた。

子供を抱き起こすと、砂色の柔らかい金髪が俺の肩を撫ぜる。

ガラスの細かい破片などが入り混じった砂利道に布を敷き、その上に彼女を寝かせる。

ボ口雑巾を剥ぎ取り、赤黒く乾いた血がこびり付いた、幼い少女の股間が露になる。

胸を切り裂くような無残さだった。

俺は一瞬そこから目を背け、目をつぶった。苦痛に歪む少女の顔が脳裏をちらつく。

そつと、彼女の下腹部に手を添えて全神経を集中させる。

俺の手から暖かい気が送り込まれ、少女はぴくりと小さく反応した。彼女の汚れた頬を、もう何度目かの涙がまた流れた。

すぐだ…すぐに、開放してやる。

あどけなかった顔を苦痛で歪ませたその頬を、優しく撫で、そう誓った。

俺は、瞬きもせずに目を見開き、彼女の生を必死に繋ぎとめようとした。

これが終わったら、元に戻る。なにかも、かならず元に戻してみせる。

彼女を、全てを凝視している俺の目が乾き始め、うつすらと涙が浮かぶ。

苦しく喘ぐ少女を麻酔で眠らせなかったのは酷だった。

だが、逆にそれが命取りになる場合もある。

なによりも生きようとする強い意志が、これには必要で何にも変えられない原動力なのだ。

ブブブ…と小さく小刻みに振動するそれが、今まさに少女の下半身から出ようとするときだった。

この実に苦しい佳境に彼女の精神がついてこれず、気が微弱になっ
ていく。

俺は、彼女の小さく冷たい手を握り、何度も何度も「生きる」と懸命に声を張り上げる。

今の彼女にその言葉は、きっと何よりも酷い言葉に違いないだろうとも思った。

だけど、俺はその三文字を繰り返して掛ける。

聞こえているか聞こえていないかが重要じゃない。きっと、彼女は応えてくれる。

ミシ…と小さな音がして、膣からどろりと血が漏れ出た。少女が掠れた声で低く長く呻いた。

その血にまみれた忌々しい物体が這い出るや否や、彼女はぱたりと全身の力を失わせた。

俺は、すぐさま無数の処置に取り掛かった。

処置が施された小さな裸体を赤子のように布でくるみ、
俺は静かに眠る幼い少女を胸に抱きこんでゆっくりと立ち上がった。

背後で影が揺れ、微動だにしなかった気配が身じろぎした。
振り返ると真つ黒な瞳とかち合い、その意志の強い目で例の女の子
が俺を見上げていた。

”リーチャン”だったか…

”出て行け”と言ったのに、あの子だけが立ち去らなかった。

あんなところを最後まで見届けるだなんて…見上げた根性、否、な
んという強い
精神力なのだろう。

俺は、幼い少女を彼女に託して無言でその場を離れた。

「…、まって」

か細い声で呼び止められたが、俺は歩を止めなかった。

「私にはお金がないの…だから、だから、この身体で…」

その未熟な身体でどうするのか、その先は聞かなかった。

曲がり角の先で見事な金髪をした少女が、腕組みをしながら壁に背
を凭れさせて、
睨むでもなく、ジッとこちらを見ている。

射抜くような鋭い視線で、横を通り過ぎる俺を見つめ、やがて口を開いた。

「…アンタと同じジャポンだったわ」

だから、なんだ。それが、どうした。

俺がたまたま東洋系の顔をしているからって、生憎生まれはジャポンなんかじゃねえ。

あの子をめっちゃめっちゃに壊したのも俺じゃねえ。…お門違いもいいところだ。

俺は、ガツと壁を強く殴った。

すっかり人気のなくなった路地裏を抜けて、煤だらけのベンチに腰を下ろした。

咽るような感情に重苦しく息を吐き、頭を垂らす。

暗い表情で、自分の両の掌を見つめた。

「アンタと同じジャポンだったわ」

金髪の女の子の声が俺の頭をメリーゴーランドのようにエコーする。

彼女の言い放った効果は、絶大だった。

それは、足枷のように俺に纏わりつき、砂地をさ迷い歩く囚人のように

ずんと重たく足を引きずらせるのだった。

「アンタと同じジャポンだったわ」

”あの子を買ったのは”

．．．嫌な気分だ。吐き気がする。頭が痛い。疲れた．．．

そんな折、妖しい二つの気配が近づいてくことに気がついた。

”気配を消した”気配…そんな感じた。怪しいにも程がある。

物凄いスピードで11時の方角から迫ってくるが、もう、どうでもいい。

否、むしろ…丁度いい、か。

ちょうど、人を殺したくてうずうずしていたのだから。

俺は頭を垂らした姿勢のまま、黒に近い紫のオーラを解き放つと、たちまちに気分を高揚させた。

しかし、あと60m付近でその妖しい気配はピタッと止まってしまった。

いいだろう、こっちから狩らせて頂く…

そう、頭を上げようとした時だった。

奴らは、隠していたオーラを解き、己を俺に知らせた。

そのお馴染みのオーラに、俺は一気に気分を萎えさせた。

「また、お前らか…」

がつくりと項垂れる。

朽ち果てたビルから姿を現したのは、デカイのとチビッコイの、凸凹コンビだった。

「チビッコイとは、余計ネ」

似非チャイニーズのような発音で、チビッコい方が不機嫌に言った。その傍らの3メートルにも及ぶだろう大男が、アッハッハと豪快に笑った。

…イメージ通りの笑い方である。

「よう、せんせー！」

開口一番、陰気に言い放つチビと、陽気に笑う大男。なんというまあ、こんなに真逆な性格の奴らがコンビで来るとは珍しい。

俺は、面倒くさそうに顔を背けて頭をボリボリと掻いた。いや、実に面倒くさいのだが。

「…空気読めよ…」

「団長が呼んでるネ」

「疲れてる、もしくは死んだと言ってくれ」

「がっはっは！最後の”死んだ”は、さすがに信じちゃくれねーぜ！」

確かに、あの疑り深い青年のことである。地の果てまで探し出しそうだ。

「”疲れてる”も即却下ネ。早く来る」

「そう言っている割には、あー、もう既に俺は引きずられてるんですか…」

「いやー、今回はさすがの俺たちも骨が折れたぜ！」

聞いちゃいねえ…

「奴ら、赤い眼になったとたん、びっくりするくらい戦闘力上げだよ！」

おかげで、こつちも思う存分暴れまわってやったぜ！」

ガハハ…と笑う大男の片腕は、なかった。？ぎたてほやほやのその傷口は、オーラで

止血したのか、器用にふさがっている。

「お前らんとこにも、外科医がいたろう」

「あー？マチのことか？」

「マチは今、眠り姫になってるネ」

「そりやまあ、えらく骨が折れまくったでしょうな」

そんな皮肉をばやきながら、俺はチビに引きずられるまま、スラム街を離れた。

赤い夕日が、地に伏せるように沈み、俺たちの影が長く細く、灰寂れた町に差し掛かる。

「…ところで、さっき物騒なこと考えてただろう？」

「…さあな」

俺は、腕組みをしながらすっとぼけてみせた。

第一部 - 1 - 出会い

救急車のストレッチャーに一人の男が括り付けられていた。頭から血を流し、身体の随所にも怪我をしている。

何の不思議はない。だから救急車に乗っているのだ。

だが、奇妙なことにそれを取り囲んでいるのが

制服を着た救急隊員でもなく、真つ黒なスーツを着込んだ人相の悪い連中なのである。

頭から血を流している男は、始終苦しそうに唸り、それをスーツ男たちが薄ら笑いを浮かべながら見下ろしている。

「コイツ、相当苦しうたぜ？」面白がるような口調だ。

「おい、今効いてるんだよな？これ、効いてんだよな？」

「ああ、今頃人生で最悪な場面を思い出しているはずさ」ともう一人が答える。

「おい、コイツなんか言ってるぜ？」

「教えてやれよ、俺たちがお前を殺しにやってきたヤツだってよ」

「よく聞けよ、お漏らし野郎。俺たちがお前を……」

しかし、その続きは中断された。後部座席と前の運転手席を仕切る窓が開かれ、中から男性が睨みつけてきたからだ。

「黙れ、余計なことを吹聴するな」

「…ここは・・・だ、だ、れだ」

怪我をした男が、涎を駄々もらしながら誰にともなく問いかける。

「おい、よく聞けよ、連邦警察になんか話したろ？何を話した？」

「黙れ！」

「…なんのこ、とか・・・」

「さつさと吐け！俺たちはお前を・・・」

「チツ！」

運転席に座っていた男が銃を発砲し、スーツ男の一人が脳天から鮮血を噴出して倒れた。

「黙れと言っただろうがっ！この、クソったれ！」

リーダー格らしいその男は、残りの奴らに銃をぶんぶん振り回しながら悪態をつく。

「てめえらもだ、いいな！」

そう言っ、ピシャツと窓を閉めた。

手下たちは一気に静かになったが、ストレッチャーに括り付けられ

ていた男の様子が
どうもおかしい。

きつく縛り付けられ動かせない両手両足を無理やり動かそうと身体
を激しく揺らし、
ストレッチャーがその度に騒がしい音をならす。

「うるせえと言ってんのが、わかんねえのか！」

再度、窓を開けて銃を突きつける。

「で、でもコイツ様子がおかしいぜ」

手下たちは中途半端に両手を挙げながら、口々に訴えた。

「おい、口から泡を吹きやがるぜ…コイツ」

「だから、なんだってんだ！つべこべ言ってねえで、黙らせろッ！」

そう言われて、手下たちは怪我した男に飛びかかった。

怪我した男は、血走った目をカッと見開きながら獣のような唸り声
を上げて

身体全体で抵抗した。

「おい、そっち押さえろ！」

「おい！ちゃんと押さえろよ！」

そうこうしているうちに、ストレッチャーのストッパーが外れ、
目を見張る間にドアを押し開き外に飛び出してしまった。

バツと勢いよく開かれた後部ドアから盛大な落下音を立てて担架が落ちた。

パッパとクラクションが高らかに鳴り、担架は啞然とする一同の目の前で

トラックの前輪に轢かれてぐちゃぐちゃに潰されてしまった。

運転席にいた男も開いた口がふさがらない。

無意識に手下たちを皆殺しにし、「マザーファッカー！」と一言悪態をつくと

アクセルを力任せに踏みつけた。

.....

カラン…と小さな音がして、スプーンが落ちた。

パチパチと数回まばたきして、周りを見渡す。

ウェ이터がすぐさま駆け寄り、新しいスプーンを手渡した。

「どうぞ、お客様」

「あ、ありがとう…」

コツ・・・と何かがテーブルに当たる音がして視線をやると、銀の腕時計がコチコチと針を動かして10時40分を知らしていた。

片手を上げて、ウェイターを呼ぶ。

さっさと支払いを済ませて、外の空気を吸いに行った。

ボーと汽笛が鳴り、カモメが飛ぶ。

タバコを吸い、咽た。げほっげほっと咳をして、ふとレストランの窓ガラスに

映った少年と目が合った。

ぼんやり見ていると、少年も同じようにタバコを片手にこちらを見つめ返していた。

ああ…そうか。自分か…

シュボツとライターに火をともし、少し感度を抑えたタバコを選び、火をつける。

そりゃ咽るわ。ガキにゃ、早い。

一気に灰に流しいれた煙を、ふーっと鼻から吐き出して空を見上げる。

曇天の空からパラパラと雨が降り始め、俺はコートの襟を立てて足早に
赤レンガ通りを駆け抜けた。

どん、と腰辺りで鈍い衝撃を受けよろめいた。

「どろぼーうつ！」

前方で誰かが叫んでいる。

すれ違い際に黒髪の小さな突撃者が赤いショルダーバッグを大事そうに

抱え込んでいるのが見えた。

「どろぼーよつ、どろぼーう！誰かそいつを捕まえてっ！」

それを聞いて走り出す奴はいなかった。

ショルダーバッグを盗まれた観光客風のおばさんが地団駄を踏んで走り去る少年に悪態をついた。

俺は、タバコを銜えなおして歩みなおした。

パラパラパラ…と、肩に降り当たる小雨の量が増えた。

チツ…

本格的に降ってきそうだ。

俺は公衆電話を探しながら先を急いだ。

誰も見向きもしないパブの裏手、酒樽の上でタムロってるガキ3人に公衆電話はどこかと聞く。

ガキ3人はそろって左手を指差した。

「…おいおい、この薄暗い横道を通ってけつてのか？」

冗談じゃないぜ。たちまちお前らみてーな輩に身包み剥かれるのがオチだ」

「ほんとだよ。一緒に行こうか？」

”一人で小便に行けないなら、一緒に行こうか？”というノリで言われた。

俺は、片眉をぴくりと上げつつも”お願いします”と即返事して三人の後についていった。

「あ、待ってくれ」

道の途中で、ふと呼び止められて振り返る。

サラリとした金髪を肩まで伸ばした少女。歳は同じくらいだろうか。彼女の容姿と珍しい服装に、俺はてっぺんからつまさきまでジロジロと見た。

前後に長く垂れ下がったポンチョみたいなのに首を通して被っている。

因みに、ポンチョは水色の生地金の刺繍・・・変わった格好をした旅人だ。

「この町の駅に行きたいんだが・・・」

少し低めの声で少女が言った。

「悪いが、ここのモンじゃないんで」

俺は、そう言ってチラリと前にいるガキ三人に促した。

「・・・駅？あそこまではすごく遠いよ。バスに乗って行かなくちゃ」

「そのバスは・・・」

少女がそう言いかけた時だった。ガシャーンと割れる音の後に、ドンという鈍い音が頭上から聞こえて、俺たちは傍にあったボロいアパートメントを振り仰いだ。

「離してっ！やめてーっ！」

アパートメントの階段をドタドタと駆け下りて現れたのは、泣き叫ぶ女の子。

「うるせーっ、黙ってる！」彼女の腕を無理やり引っ張り、男が怒鳴る。

どこの家庭も大変なこっで・・・俺は、さも関心のなさそうなガキ三人と共に前を向き直った。

後方で、またバタバタと階段を駆け下りる音がして、野次馬的心情でちらつと背後を振り向いた。

「やめろっ！」

6歳くらいの少年が男の懷めがけて走ってきた。手元にキラッと光る刃物。

「リオネル！」

女の子が息を呑むように叫ぶ。

と、その時。何を思ったのか、先ほど道を聞いてきた少女が男と少年の間に割って入ろうとした。

だから俺は、思わず手を引き伸ばし”それ”を掴んでしまった。それは、俺の掌を切り裂き、ポタリと赤い雫を滴らせた。

一瞬の痛みが走り、少年の目と目が合った。

少年は充血した瞳を揺らし、ショックで言葉が出ないでいる。

「なにしてんだ、このクソガキ！」

先に動いたのは、このろくでもない親父風の男だった。

子供に向かってまっすぐ振り下ろす拳をもっ片方の手で受け止める。俺は顔を上げて、奴の目をまっすぐ見て言った。

「・・・どうした、ボディがガラ空きだぜ？」

ドスツと奴の腹に一発お見舞いする。

男は、つばを吐いてくの字に吹っ飛んだ。

・・・きつたねえ・・・

ぺちゃっと頬にかかった唾液を手の甲で拭い、男に近づいた。

・・・容赦しねえー

壁に背中を強か打ち、ぐうっと音を上げた男をこれでもかと踏みつける。

よくも、よくも、よくも俺の顔に唾をかけやがったな・・・

「・・・めろ！もう、やめろ！相手はとつくに・・・」

そう呼び止められて、中途半端に上げた片足をピタリと止めた。顔の半分がやや崩れて血みどろになった男を見下ろし、ガツとそのまま踏み下ろす。

無駄なことをした。

何度も俺を止めるために呼びかけていた金髪の少女が身じろぎ、一歩、また一歩と後ずさった。

振り返ると、助けたはずの女の子と男の子はぎゅっと身を寄せ合い、酷くおびえた目で俺を見上げていた。非難の色がさしたその瞳から視線をそらし、

俺は首をボキボキ鳴らしながら、その場を離れた。

なんだってんだよ、・・・どいつもこいつも・・・

案内をしてくれるはずのガキ共の姿も、もうそこにはなかった。

やっとのことで公衆電話を見つけ、携帯を取り出しアドレス帳を開く。

ぴっぽっぽと、玩具のようなプッシュ音のあとに、しばらく続く呼び出し音。

8回目のコールの後にやっとな手が出了た。

「...おい、遅刻魔の俺様を待たされるなんざあ、いい度胸だな...」

電話口に相手が出ると早々、俺は愚痴を言った。

相手は”予定が変わった”と、至極短絡的に答えた。もともと口数の少ない奴だったが、謝りもナシかよ…確かに、期待してもいいねーけど。

「おいおい、しっかりしてくれよ。団長さんよーおー」

俺はイライラと絡むように言った。とにかく、イライラしていた。相手もそれを感じ取ったらしい。

しかし、そこでピリツと突き刺すような空気に興味をそがれた。10時の方角だ。一枚の紙にポタリと雫が落ちて、すーっと染み渡る様に

ゆっくりと禍々しいオーラが広がってゆく。

電話の相手もしばらくの沈黙を守った後、”悪い、予定が変わったんだ”とまた言った。

”団員が急に代わってね・・・”と付け足す。

俺は、ふんと鼻を鳴らしてガチャンと受話器を置いた。

電話ボックスの外に出れば、その不吉なオーラはより一層強さを増し、

ピリピリと肌を刺激した。

狭い路地を縫うように行きかう群集の中に、これでもかという程の違和感。

俺は、口に銜えていたタバコを吐き捨て、ぐりぐりと踏み潰す。

・・・誰だか知らねえが、上等じゃねえか

「出ていこ」

両手をポケットに突っ込んだまま、メンチを切った。
人並みを風のようにスッスッと進み、姿を現したその野郎。

とにかく奇天烈な格好をしていた。

水色に染めた長髪をまっすぐ後ろに塗り固め、右目の下には星のペンティング、

左目の下には雫のペンティング。

しかし奇抜なのはその格好だけじゃない。・・・白目をむいている。
悪いことは言わない。

「・・・救急車、呼ぼうか？」

野郎は、白目をむいていた目にゆっくり赤茶色の瞳を戻し、糸のよう
に薄く細めた。

その気色悪い笑みを残したまま首をかしげる。

「僕は、至って健康だよ？」

その語尾の甲高さはなんなんだ、だとか

そのねっとりしたしゃべり方はなんなんだ、だとか

それ以上に突っ込むべきところがあるがあえて突っ込まん、だとか
俺は脳内を忙しくぐるぐる思考させていた。

俺がぼけつとしているのが可笑しかったのか、野郎はクツクツと喉
を鳴らした。

「・・・相変わらずだね？」

そして、にたーっ と薄気味悪く笑いかけた。

耳元を心地よくザーツと鳴らし、栗色の前髪からぱたぱた重たく雫が垂れ落ちる。

奴と俺との間には、まだ十数歩あった。

それでも、雨の中奴の声がよく通るのは気のせいなんかじゃない。俺たちは、ぽつりぽつりと気だるい会話をしながら、全神経を集中させていた。

雨から逃れるように足早に過ぎ去っていく人込み。

それにまぎれて、霞み消されてしまう奴の一挙手一投足、一言一句、逃さずに。

「おかしいな、どこかで会ったか？」俺が問う。

奴は沈黙の後、クツクツとまた愉快そうに笑った。

「……思い出して、みるかい?」

シュツという鋭く入ってくる空気の振動。俺はとっさにパシッとそれを受け止めた。

右目すれすれで捕まえたその鋭利な物体は、ジョーカーランプのカードだった。

あぶねえ！あぶねえ！

ん？ ちよつとまてよ。

「・・・4股？」

トランプは三枚。残り一つは、なんだったんだろうか。

おそらく、殺意を感じた”絶対防壁”が処理してくれたに違いないだろうが
危険因子の正体が分らないと、これからの対策がたてられないではないか。

ジョーカー、道化師、取るに足らない者。

おそらく、このジョーカーは四股の中の本命を攪乱させるための罠。シュツと奴に投げ返す。

「悪いが、お前のトランプ遊びに付き合う義理はねー」

「それは、残念？もう少し遊んでたかったのに・・・」

「お前、クロロが俺に向かわした団員だろ。因みに誰を始末してのし上がった？」

「4番？」

奴は、片手にスペードの四番を俺に掲げて見せた。・・・丁寧にどうも。

4番・・・4番・・・

俺の脳裏に、立派なひげのムキムキマッチョメンが浮かび上がった。

あの似非チャイニーズと並ぶ拷問スキーである。

「あいつか・・・俺の大事な財布の一人・・・」

「おや、それはすまなかったね？」

全く悪びれもせず、茶化したような口調だ。

「もういい。お前といると頭が痛む。さつさと用件を言え、寒い」

「あつためてあげようか??」

「うるさい。早く言え」

途端に背筋が凍った。気がついたら俺は、奴の両腕の中で身動きとれずにいた。

チツ、ぬかった・・・!!

「?」

ゴツと鈍い音をさせる筈の俺の頭突きは避けられた。

野郎は、背後から覆いかぶさるように俺を見下ろしていた。

「だめだよ？ 君は、ほんとに殺気以外には鈍感だね？」

余裕綽々と言った表情だ。

その神経を逆なでするような不敵な笑みに、短気な俺がぶちギレるのは容易かった。

「お前なあッ！」

俺は声を荒げて振り向いた。周りの視線が非情に痛い。

「なに??」

「なに?じゃねえッ! テメーのナニがさっきから当たってんだよッ!」

ズボンのポケットに入れ忘れた筆箱みたいに、それは俺の背中より下をガツガツ当たっている。

その感触が当たるたびに、全身鳥肌が立ち背筋が凍るのだ。

「ナニってなんだろうね?」

奴は耳元でクククツと低く笑い、俺はぞわつとした。

「やめろ! 離れろ! 近寄るな! 触るな! 色魔! 欲情魔! バカ! 変態!」

耳元まで顔を真っ赤にして絶叫する俺に救いの手はこない。

それどころか、好奇心に満ちたゲス共が遠巻きに俺たちを囲っている始末だ。

「見世モンじゃねえ!! 失せやがれッ!」

「嗚呼、興奮するよソレ・・・? その顔、ますます欲情しちゃうよ?」

クソ野郎は、するすると俺の首をなぞるように顔を埋め、

俺はビクツと身を強張らせて固まった。

情けねえ・・・だが、真の変態を前にまるでパブロフの犬。思考回路がパンク寸前だ。

さっきまで集中力を研ぎ澄ましていたのが仇になった。

奴の息遣いが心臓の鼓動が視線の先々が、俺の身体中に響き、捉え、離さなかった。

じわっと嫌な汗がにじみ出るのを、奴は舌先でなめ取り、それが耳の裏に当たると

俺はがくつと身体中の力が抜けそうな感覚に陥った。

「ククククツ・・・だめだよ、まだイツっちゃあ・・・？」

その耳障りな戯言に正気を戻してきた私は、深い眠りから覚めるように

”本来”の感覚を取り戻していった。

すーっと解き放たれた紫と翠の”ダブル”オーラ。

空間が空間を切り裂き、風が耳元を荒れ狂う。

飛沫を上げる赤い鮮血が眼を覆い、刹那鈍い衝撃が肩を走った。

ドスドスドス・・・と無数の振動が背中に伝わり、肩の痛みが止んだ。

自分を捉える腕の力が弱まると、自由を奪っていた重たい荷物が離れズルリと地面に落ちた。

まだヒリヒリと痛む肩に触れると、傷口があった。段々と紫に腫れ、血を滲ませている。

この犬ところ、噛み付きやがったな・・・

くるりと振り返り、見下ろした先には
無数の氷の矢に貫かれたゴミ。そこから真っ赤な雨水が地面をじわ
じわと染めさせた。

「クククッ」

奴は、尚も笑っていた。目を開きまっすぐ私を見上げている。

「・・・思い出して、くれたかい??」

私は無言で見下ろしたまま。

「それとも・・・」

ボキボキと腹から突き出した矢尻を折り、ふらりと音もなく立ち上
がる。

「・・・本気で、・・・忘れたのかい？」

ザーザー・・・

世界を洗淨するかのように雨が降る。

不思議に静かな時だった。

周りは皆、地に伏して二人だけが根が張ったように立っていた。

どのくらいそうしていただろうか・・・

ただ雨に打たれ傷口からドクドクと血を垂れ流すその立ち姿は酷く奇妙に思えた。

身体中を切り刻まれ、裂け、抉られた部分から胴体を伝い股下を流れ落ちる血液が、
ちよろちよると赤い川のようにこちらに伸びてくる。

「・・・似合ってるぜ、その格好」

ニヤリとほくそ笑みながら、ポツリとつぶやく。

だが、血塗られた胴体から伝い落ちる真っ赤な雫がやがて薄まっていくのにも
気がついた。

完全に治癒したのか、はたまた、ただ止血処理しただけなのか。

奴の能力が何か知らないうちに、切り札を出したのを今更ながら悔いた。

しかし、後先というものは後から来るもので、もう考えないことにした。

「もう止めちゃうのかい??」

スツと片足を前に出し、ゆっくりと近づいてくる。

「・・・てめえーこそ、どうして止める？出血多量でくたばれ、バカヤロー」

吐き捨てるようにそう言うと、奴は目を細め、絡みつくような視線で私を見た。

そんな風に見つめれる覚えは全くないのだが。

「・・・遠くでも分かったよ？僕が君を間違える筈がない？」

だめだコイツ、会話できねえ。

ゆっくり私に差し伸べられた手が、雨に濡れて目にかかった前髪を指で払うと、

そのまま頬に触れ顎を伝った。

彼の瞳に狂気は消え、代わりに、その瞳に映った無機質なまでに無表情な私が

自分を覗き込んでいた。

「知って、るのか？」

私は、そこまで言うと、ごくつと生唾をのんだ。

”・・・名前を・・・”

その言葉は宙ぶらりんのまま私の喉に引っかかった。

奴は相変わらず何を考えているのか分からない顔で

ジツと私を見つめ、やがて口を開いた。

「それは、自分で知るべきなんじゃない??」

トンと肩を指で押され、ズキツと傷口を痛ませながら私は仰向けに倒れた。

ドサツと覆いかぶさるように馬乗りにされ、雨でぼつれた奴の前髪がパサリと私の頬にあたる。

「・・・相変わらずだね? 相変わらずだ? なぜ守ろうとしたんだい?」

雨の雫が目に入り、私は目をつぶるとまたゆっくり開けた。

「何の話だ?」

「集まってきた連中のことだよ? 僕の念から守ろうとしていた?
・・・殺意だけで人を殺すのは簡単だからね?」

そして、ニヤリとしたり顔で微笑む。

「でも、結局自分で殺しちゃうのに・・・?」

確かに奴の殺意に溢れたオーラはひどかった。

その殺傷力は、能力者ではない者がそれを感じるだけで死んでしまう程度だ。

だから、自分の能力を彼らの周りに発動させた。だけど・・・

私は、言葉を返せなかった。

「君はぼくらと同じ？」

耳元に口を近づかせ、興奮したかすれ声でささやく。

「・・・同類なのさ？」

「違う！」

殴りかかろうとして両腕を捕まえられた。

「ククツ・・・思い出してあげるよ？じっくりと」

その不敵な笑みに、嫌な予感しかない。

必死に捉えられた腕を振りほどこうともがく。

ここで成人男性に変化しようかとも思った。

だが、それでも潜在的な体力差は明らかだったろう。

手札を見せたくないというのは、嘘ではない。だが、100%真実でもない。

極力、能力を使いたくないのだ。なぜなら・・・

「自分でも気づいているんだろう？君は、期待の星だった？」

僕とは違う遠い場所にいたが、君の功績は誰もが知っていたよ？

君は美しい・・・そして輝いていた？誰もが君を羨んでいた？・・・
思い出したかい？」

「やめろッ！・・・何も言っな！」

「最も、君は特異中の特異？異質だった？兄弟同然にすごした仲間や”ファザー”殺し

までして何がしたかったんだい？僕は、それにスゴク興味があつてね・・・？」

「知らない！私じゃない！知らないんだ！」

「真実を話してくれるだなんて、思っちゃいないよ？それに・・・女性の我慢強さは、拷問でよく知っているから？」

そこで、言葉を区切って満足そうに私を見下ろす。

「ああ・・・思い出したよ？君の名前」

私は、憎しみたつぷりに奴を睨みあげた。奴がゆっくり口を開いて言葉をつむぐ所作がスローモーションに見えた。

「セ・・・」

その先の言葉は奴の口から綴られることは不可能だった。頭の中にはつきりと現れたスperl。圧縮される空気。再び放たれるオーラ。

私は身を守るために身体中を堅い信念で覆った。念能力者が修得できる四五行の応用技”堅”だ。

針の穴ほどの異変を感じた奴は、瞬時に飛びのき、視界から消える。

その一瞬の判断。彼の研ぎ澄まされた勘は素晴らしかった。伊達に場数を踏んでいないだろう。だが、私の能力もそれで終わりではなかった。

くいつとルートを変えて、圧縮された巨大な力が奴を追う。

私は自分が巻き添えになることもなくなったので、
己を守り固めていた”堅”を解除し、その余力を攻撃にありったけ
注いだ。

奴が一発目の判断に従ったのが正しかったのか、
私が最後の一滴まで力を余すことなく使い果たしたことが幸か不幸
かは、神のみぞ知る。

そして、薄れ行く記憶の狭間で、私は懐かしい師の顔を思い出して
いた。

- 4 - 追憶

深い深い眠りに落ちた。

．．．．．
．．．．．

日常茶飯事に受けられる暴力、排泄したものを食らわされるという
屈辱、
両手両足を縛られ、裸のまま冷たく硬い地面に這いつくばされ、
腹部を臀部を背中を蹴り上げられ、また蹴り落とされた。

「．．つぐ．．知らない！私じゃないっ！」

立て続けに身を襲う苦痛の後に後ろ髪をつかまれ、顔を上げさせら
れると
彼女は狂ったようにそう訴え続けた。

「私じゃない！本当に知らないんだっ！」

喉を絞り声の限り叫ぶ。知らない、私じゃない、知らない

茶色く汚れ、手入れの行き届いていない簾のようになるところどころ汚
れで

固まった髪を振り乱すその人を私は空中で見下ろしていた。

女性は舌をかむことも許されず、ただいつ終わることもない拷問に耐え、生きていた。

歳は、20そこらだ。もし本当のことを言っただとしても助かるわけではない。

むしろ、用済みだ。それならば、最期まであぐとといったところだ。

これほどまでに絶望的な状況でさえも彼女の生へ執着はすさまじかった。

本能からくるものなのか、それとも執念がそうさせるのか・・・いや、

そう訓練されているのだ。

名をセルビア。

容疑は二重スパイ。

私は、足元で執拗に鞭を振るう男共を睨みつけていた。

そう、彼女は”過去”の私だ。

涙一つ流さずに己の限界に達し、床の上で失神している。

こんな胸糞悪い記憶を呼び起こした道化師元凶に呪いの言葉を吐きながら、

一刻も早くこの場面が終われと祈った。

何度も言うが、神にはない。

なんもん、便所に連行して糞を食らわしてやるさ。

・・・床の上で伸びている己のために、自分の中の確固たる自分に、祈ったのだ。

薄汚れた灰色の四角い空間。その隅に無造作に置いてあった樽に手を伸ばし、

男のうちの一人が床で伸びている女性に水を浴びさせた。

程なくして、その人は目覚めるだろう。そして、また繰り返されるだろう。

．．．．．

場面が変わった。

一列に並ぶ兵士に両腕を捕まれ、引っ張られるままに歩を進ませる。骨と皮だけになった手が、力なく、だらりと垂れ下がり歩きたびに太ももに当たる。

その度につめたい手錠がカシャンカシャンと音を鳴らした。幾数にも重なった手首の傷は勿論自傷で出来たものではない。

ゲートへ向かう時間がとても長く感じた。

密かに逸る気持ちを抑え、長官の機嫌が変わらないようにうな垂れたまま歩く。

ガラガラガラ．．とゲートが横に開かれて、初めて顔を上げた。ゆつくりと、目を細め。

明らかに、風格、背格好の違う異国の兵士がこれまた一列に出迎えた。

そこに、見知りの顔はいなかった。

囚人の引渡しを終えると、私の両腕を引っ張っていた兵士どもがくるりと90度に

向きを変えてザッザッと元来た道へ戻っていった。

・・・野郎、手錠を外さずに行きやつた。

異国の兵士が女の手首を手に取り、カチャカチャと錠を外す。

やっと外されたそれが地面に落ち、彼女は軍用ジープに乗り込んだ。一人の兵士が携帯電話を渡した。

電話の相手は、しわがれた声でねぎらいの言葉と次の目的地を告げ、電話を切った。

女性は携帯を兵士に手渡し、視点の定まらない瞳をふつと窓の外へ向けた。

殺風景な荒野に、点々とやせつぼちの木が突っ立っている。

隣に座る兵士にタバコをもらい、車に身体を揺らせながら懐かしい味に睫を震わせる。

「・・・うまいだろう」

誰かが、そう言った。

女はゆっくりと瞳を閉じ、久しく味わっていなかった深い眠りについていた。

.....

•
•
•
•
•

.....

ひやりと足元に床の感触をおぼえた。しかし、ここは夢の中。そのはずはない。

視覚がそう感じさせるだけなのだ。

むき出しの床を裸足でぺたぺたと歩き回って、周りを見渡す。
縮れてところどころ灰色になった懐かしい毛布、寝返りを打つたびにギシギシとなる

懐かしいベッド、ふわりと優しい風を運んでくれる黄色く変色してしまったカーテン

懐かしい時、懐かしい色、懐かしい匂い

.....ここは.....

愛おしいものたちに満ち溢れたその思い出の空間に、こうして戻ることが出来たことに

思わずじーんとこみ上げるものがあつた。

狭いベッドの隅で丸まっている小さな塊。それを包みこむ毛布が規則的に上下するのを

熱くなる目頭を抑えながら見つめた。

ぼーっと突っ立っていると、小さな塊がぴくりと身じろぎした。

来る・・・！

彼が・・・

懐かしさと愛おしさで目を細め、逸る気持ちを抑えてドアを見つめる。

背後で、”過去の自分”がサッと素早く動く気配を感じた。

ベッドの下に潜り込んだのだろう。確か、そうだった。

彼との初めての出会いは、薄暗く埃くさいベッドの下だったのだ。

トクン、トクンと胸が高鳴り、瞳が揺れる。

思ったより長い時間だった。ふと、ぽつんとドアの脇にある写真立てが目に入った。

チェストに二つ。左右に並べている。

ゆっくり近づくと、写真の人物が笑いかけた気がした。

一つを手に取り、思い出に浸る。そこには、灰色の髪をした男性と金髪の柔らかい髪をした

女性が、目の縁に細かい笑い皺を刻ませて穏やかに微笑んでいる姿があった。

男性は健康的な肌に白い歯を覗かせ、女性の方を優しく見守っている体だった。

”ヨゼフとアンネ、永久に”

写真の隅に見慣れた白い小さな文字がそう刻まれていた。

「・・・ヨゼフ・・・アンネ・・・」

カチャリと音がして、ドアが静かに開いた。

初めにパンとミルクを載せた盆が現れ、次にしわくちな老人の手、そして・・・

ヨゼフは、穏やかな目で部屋を覗いた。

ベッドの上に寝ているはずの小さな客人はいなかった。

クスと笑うと、まっすぐベッドの方へ歩いた。

私は、ヨゼフが傍を通り過ぎるのをどきりと胸を跳ね上がらせて思わず飛びのいた。

・・・見えているわけではないのに・・・

そう、彼には見えない。

私は・・・こんなにも傍にいるのに、彼に触れることすら、もう出来ないのだ・・・

「・・・知らない場所で、知らない人に会うと、私も身を隠したくなる」

歳を感じさせないはつらつとした声だ。しかし、今こうして聞くとわかる。

暖かく、どこまでも愛に溢れた優しい声だった。

「そして、幼い頃そこが身を隠すのに一番安全なところだとも・・・

「ヨゼフは、カチャンと盆を床に置き身をかがませた。

「・・・思ったよ」

そこには、確かに愛があつたのだ。

ベッドの下で這い蹲つて身を守る少年に優しい笑みをかけたのは、彼が最初で最後だったかもしれない。

ヨゼフは、少年の心が開いてくれるのを気長に待つてくれた。朝、少年の部屋をノックし食事を床に置き、新聞を取りに玄関に戻り、そして居間にあるレコードに針をかける。

レコードはいつも、ジャズとビートルズが流れていた。他は、流さない。

老人と少年は、静かな時を過ごし、やがて少年は老人に心の扉を少しだけ開けた。

老人がそのきつかけを与えてくれた。少年は老人に興味があつた。ただ、「やり方」がわからない彼に、老人はさりげなく言った。

「春はいい。暖かく、草木が芽吹く。夏もいい。ギラギラと熱い太陽が古い私の血潮をもう一度沸かせてくれる。秋もいい。美しい夕焼けに思い出を映し

ていつまでも未来を語りたい。

冬もいい。やがて来る暖かい春の喜びを一層強くさせてくれる・・・
ただ、

この喜びを分かち合う人がいないんだよ。・・・君はどうかな？」

少年は首を横に振って”いない”と答えた。

老人は目尻を垂らしてフツと笑うと言った。

”じゃあ、ちょうどいい。一緒にどうかな？”

少年は買い物を覚えた。

老人から手取り足取り教えられたことを水を吸収する綿のようにすーっと覚えていく。

食材の食べごろを学び、器具の使い方を学んだ。

少年が始めて作ったフレンチトーストはほんのり苦かった。

ポタージユからは、たまにごろりとした不思議な物体が混ざり、肉料理に至っては出来上がるまでに食べてしまう始末だ。

模範的な生徒ではなかったが、学ぶ姿勢は満点だった。

少年は挨拶を覚え始めたころ、自分以外の”別の人たち”が目尻を緩め口元を弛ませ

表情を柔らかくさせるのをまじまじと見つめていた。

「よしてよ。もう、この子ったら。そこまで美人な顔でもないのに、まったく」

そう言つてまんざらでもなさそうに頬を緩ませるのは、小さなスーパーの女主人だ。

恰幅のいい女主人は、見た目に反することなく中身もおおらかな人だった。

女主人は、少年が毎日買い物に来るのを楽しみにしていた。彼の成長をヨゼフと共に喜んだ。

「どうだい、あの子は？」

「物覚えはいい。今、ピアノを習わしとる」

女主人は、目を丸くさせた。

「ピアノを？」

ヨゼフは、嬉しそうに口に蓄えた立派なひげを撫でた。

「ああ・・・自分から触れたんじゃないよ」

とても嬉しそうだ。女主人はそんなヨゼフを”あらあら・・・まあ”
と言って笑った。

・・・

ある日、買出しを頼まれた。

メモに書かれてる食材を小声で反芻しながらバスを待つ。

1ダースのスビョークラ、スメタナ、そして肉、肉、肉。最後にタ
ーキーをまるまる一匹。

「そんなもの、いつものおばさんのところで買えばいいじゃない？」
”だめなの？”と少年はヨゼフを見上げて言った。

ヨゼフは、人差し指を少年の前に掲げ、いたずらを思いついた子供のように

黄金虫のような丸い瞳をキラツとさせた。

「一人でバスに乗ってみてもいいだろう」

前言撤回だ。少年は快く頷いた。

町の雑踏に混じって、500m先、西の方からバスの音がした。

．．．違う、あれじゃない。

耳を澄まして、ブツブツとメモに書かれたことを反芻しながらエンジン音を聞き分ける。

ブルブルブル．．．と面白い音がした。

あれだ！

少年は、目を凝らせてその先を見た。程なくして、坂の下から茶色の小さなバスがやってきた。

ブルブルと小刻みに揺れながら、ピタリと少年の前で止まる。

いや、ただ単にそこが停留所だったからだが。

少年は、意気揚々とバスに乗り込んだ。

運転手席の小脇にある小箱に目をやり、いつもヨゼフがチャリンチャリンと小銭をそれに

落とす役目を、今日は自分がやるんだとわくわくした。

過ぎ行く町の景色と道を行きかう人々の様々な表情を流し見ていると、危うく目的地まで過ぎてしまうところだった。

「おります！おります！」

慌てて、ポケットから用意されていた金額を取り出し小箱に落とす。

「130ジェニーだよね？」

勿論、コインを小箱に落とす前にそう聞いた。払ってしまった後に、怪しまれて多く取られたらたまったもんじゃない。

これも、ヨゼフに教えられたとおりにやった。

運転手がニコニコと頷き、少年はバスを降りた。

程なくして、リストに書かれた買い物はあと一つを除いて終えた。リストの最後の行に、米印でこう書かれている。

” つり銭で好きなものを買いなさい ”

ポケットに手をつ込んで小銭をチャリチャリさせた。

あと、お札も数枚ある・・・

ヨゼフ直伝、” ねぎりスマイル ” で結構お金が浮いてしまった。どうしようか・・・

あちこち物色したものの、どうしたらいいか分からないままバスに乗る時間になってしまった。

仕方ないので、つり銭はそのまま渡そうと決めたが、バスに乗っている間中、

まだそのことについて考えている自分がいた。

そして、思いついた。

．．．．．

チリリンと鈴の音をさせてガラス扉を開ける。

「おや、あんたかね？」

店の主人が朗らかな笑顔を向けた。

「おばさん。ヨゼフがいつも買ってるの、ある？」

「隣町まで行ってきたのかい？ひとりで？」

おばさんは、少年の大荷物を見て驚いたような感心したような声を出した。

少年は、コクンと頷いた。

「えらいじゃないの。そこまで出来たら立派だよー」

少年は、居心地悪そうに少しはにかみながら視線を外した。

「うちの坊やたちも見習って欲しいわね。店の手伝いもせずに・・・外で遊んでばかり・・・」

後ろを向いてごそごそとしているので、おばさんの大きなスカートの包まれた丸い大きな

お尻がこちらを向いていた。

少年は、ジーツとそのお尻を見つめていた。

・・・一体、なにをしたらこんなに膨らむのだろうか・・・

おばさんがニツコリして振り返ったので、少年は慌てて視線を外した。

そして、ピクツと身構えた。

「これ、これ。ヨゼフじいさんの好きなもの」

おばさんは赤いラベルが貼られた透明な瓶を振って、にやっと笑った。

「えっと、これで足りる？」

少年はポケットから有り金を全部出した。

おばさんは、カウンターでそれを数えると少し眉間に皺を寄せた。

「オーケー、オーケー。ついでにタバコもおまけしてあげるわよ」

そう言つて、親指を上げた。

「今日は、なあに？ なにかのお祝いの日なの？」

「えっ？ いや・・・」

「そう、さつきもおじいさんが買いに来たのよ。あんたの好きなリソゴをこーんなに買つて。

・・・全く、アップルパイでも作るのかしらって・・・あら？」

おまけのおまけで、真っ赤なりんごを無心で袋に詰めていたおばさんは、キョトンと顔を上げた。

「あら、あの子は・・・」

少年は音もなく店を出た後だった。一瞬の隙に、ドアの鐘も鳴らさ

ずに。

おばさんからもらったウォッカとタバコの入った袋だけを抱えて、
帰り道とは逆方向に歩く。

ゴミ袋が詰まれた道の曲がり角の先、人気のない細い路地裏に差し
掛かると
ボソリとつぶやいた。

「・・・出てこいよ」

頭上で、ゆらりとオーラが流れた。・・・二人か・・・

「見事だのう。坊主・・・」

少ししわがれた、だがはつらつとした声が言った。
それは、あの人を思い出す。しかし、そこに愛はなかった。

「お前さんを、みんなの前で脅す必要がなくなったのう・・・」

「・・・脅す？」殺す”の間違いじゃねえのか？」

荷物を地面に置き、両手をポケットに突っ込んで視線を上に向けた。

フツと目の前が真っ暗になった。

次いで、壁に押しやられ喉元をつかみ上げられた。

「それだったら、なぜ防御しない？ジジイなめとつたら痛い目見るぞ」

少年はポケットに両手を突っ込んだまま無抵抗を通した。

「・・・頑固なガキじゃ」

老人はそう言いつと、喉を締め上げた手元を緩ませ少年を地面に落とした。

ドサツと落ちたままの姿勢で、少年は喉元を軽く抑えた。

・・・容赦・・・してくれちゃって・・・

「だって、殺すつもりねえんだもん。けほっ、けほっ・・・お互いさま」

老人は口角を上げさせた。

「・・・、・・・面白いガキじゃ。のう、シルバ？」

もう一人は、始終無言だった。

「さて、本題に入るかの」

銀の髪を逆立たせて、一方は屈強な大男。もう一方は腰の曲がった老人。

本人たちは別段何もしていないと言うのに、彼らのオーラがビリビリと肌を刺す。

もう既に、力量の差は遙かに超えていた。

” 出会うべきではなかった・・・ ” と本能の片隅で理性が震えていた。しかし、その一方で ” 奴らの能力は何か ” という強い探究心が実に用心深く、招かれざる二人の客人を観察していた。

「・・・ガキ相手に大人気ないんじゃないの？」

地べたでまだ喉をさすりながら、少年が老人を見上げて言った。

” 一日一殺 ” というふざけた弾幕のような衣装を身にまとい、老人は腰の裏に

手を回したまま無表情で少年を見下ろしていた。

「・・・時間稼ぎはなしじゃ。急を要する依頼なんだな」

「俺は、死に急ぐつもりもねえーけど」

「安心せい。ターゲットはおぬしじゃない、コイツじゃ」

そう言って、ピッと一枚の写真を少年に見せた。人差し指と中指で差し出されたそれを

少年は受け取らなかった。軽く鼻で笑い、首を振る。

「知らねえな」

少年は冷たい視線と反比例するように心臓が熱くなるのを感じた。写真の男は、紛れもなくヨゼフだった。

．．．集中しろ．．．感じ取られるな．．．

” 奴らの能力は何か ” それだけを考える。

もしも、相手が心理を読み取るような能力であれば、一発でアウトだ。

立ち上がろうとすると、さっと背後に不気味な殺気を感じた。

そそり立つ壁のように背後に回りこみオーラを充満させる男に、神経を殺がれる。

挟み込まれた。

だが少年は笑みを浮かべたままズボンの埃を叩き、立ち上がった。

奴らの能力が知りたい、だが奴らは見せようとしないうとすると．．．

少年は、背後の大男に攻撃をしかけた。しかしその手刀は、瞬時に捉えられ

パキパキという音とともに少年の人差し指と中指が手の甲へと二つ折りにされた。

少年は大男の褐色の瞳を捉えると、ねめつけるように笑った。

大男は、自分の右手に異変を感じ視線をそちらに向けた。
ボキボキという音と共に手首が独りでに折れ曲がるのを淡々とした表情で見た。

目に見えない力によって、右手の手の甲が腕に密着しようとしている。

ゴキゴキともベキベキともいう骨折音。二本の折れ曲がった太い骨に引き裂かれるように皮膚が捲れ血が噴出す。

少年は、噴水のごとく噴出す赤い鮮血を顔から浴び、より深く笑みを刻ませた。

大男は氷よりも冷たい視線で少年を見下ろした。

「・・・悪童じゃのう」

眉間に皺を寄せ、老人がつぶやく。

カツと閃光が煌き、放たれたそれを間一髪で避ける。

目前に老人の鋭く光る眼光が迫り、彼の指の一突きをまたも身を翻し間一髪で避ける。

しかし、それでも一瞬のまたそのほんの一瞬、判断を間違えれば胴体が吹っ飛んだだろう。

「・・・だめだ、こいつら全く殺る気がねえ・・・」

少年は舌打ちした。

ほんの少しでも殺気が混ざれば、自動的に”絶対防壁”が発動される。

手札が一つばれてしまいが、そっちの方が楽なのでむしろ殺す勢いで挑んでほしいのだが・・・

「おいたは終わりじゃ。おぬしも、急いだ方がいいぞ。わしらは先客に

取られてしまった後のようじゃ・・・」

一瞬一瞬を次々に食らわされる攻撃、しかしどれも間一髪で避けられるような、

まるで自分の力量を試すような攻撃。

一体、なんなんだコイツらは・・・！！

1m四方に浮かぶ念。それに触れるとビリビリと強い電流が流れた。と、すると・・・

少年はくるりと身を返し、老人から背後の大男に向きを変えた。

ガツと腹部に蹴りを食らわし、その足を驚づかみにされる。

しかし、もう一方の足で首元を蹴りしめ、ど根性でその怪力から捉えられた右足も引き離す。

そして、顔面を踏みつけて宙を舞った。

トントントン、速さで言うともまるで階段を駆け上るよう。

そして、傍の建物の二階へ天高く飛び上がり窓へとダイブする。

その後を、素手で肉を引きちぎられた少年の右足から、ポタポタと血が舞い落ちた。

窓を突き破り、ガラスが砕け散った床でごろんと寝返りを打ち、飛び起きる。

スーパーマンよろしく、空をビューンと飛ぶ姿を見せなかったただけでも自分を褒めたい。

少年は、傷ついた右足を治癒しながら全速力であの人の元へと駆け出した。

後から追っ手が来ようと構わない。もうなりふり構ってられないのだ。

少年の頭を占めているのは、老人が最後に伝えた忠告ともとれる言葉だった。

” 先客に、とられてしまった後のようじゃ・・・ ”

- 9 - 第三層への誘い

・・・急げ！・・・急げ！！・・・間に合ってくれッ！！

バンッ！とドアが開け放たれた。

ここまで全速力で、文字通り飛ぶように来たために、
頬は上気し、荒い息で肩が激しく上下する。

息を整え、廊下を足早に過ぎ去る。

通り過ぎる際に、片手で寝室の扉に手をかざすと、これまた勢いよく扉が

独りでに開いた。

バンッ！バンッ！ 風呂の戸が開き、彼の寝室の扉も開いた。

・・・誰もいない・・・

甘い香りが充満する無人の台所。呆然と突っ立つ少年。

テーブルには、真新しいギンガムチェックのシートが敷かれ、盛り付けられた色とりどりの

野菜や肉たちが、主人の帰りを待つように鎮座していた。

部屋の片隅にある黒い大きなオルガンに、真っ赤な薔薇の花束があった。

花束に差し込まれた白いカードにすーっと目が行く。

”・・・おめでとう”

最初の文字は、大輪の薔薇の花に埋もれ読み取れなかった。
何かを祝うその言葉は、温かい彼の声で脳内を蘇った。

”・・・、おめでとう”

吐く息が次第に荒くなる。

ヨゼフと過ごした部屋という四角い箱がぐらぐらと揺れているよう。
頭がぐわんぐわんと鳴って、吐き気がした。

それは、”私”にも同じだった。

少年が身を持って体感している心理状況が手に取るように分かる。
自分にも降りかかっているのだ。

どこか遠くの方で、ガラガラと何かが崩れる音がした。
だが、この異変に少年は気づかない。

そう、それはこちらの”問題”だったのだ。

まずい、これ以上下層に落ちてはいけない。

今は夢の中。だが、記憶の中の少年はそれを知らない。

深層心理の最下層に落ちたことは一度だけある。

その深い虚無から抜け出すのに5ヶ月の時を使った。夢の中では5
0年だ。

なにもない、深い深い真つ暗な思考の溝で50年だ。

帰還を果たした今でも、思考しない脳のその奥で狂ったコマのように周りを続ける感覚が、

今でもだ。私を襲うことがある。

もしまた落ちてしまったら・・・

少年はゆっくり振り向いた。台所で甘い香りを放ちグツグツと煮られている大鍋に目が行った。その鼻を優しくくすぐる芳香に誘われるように近づく。

鍋の蓋が少しずらされていて、その隙間から暖かな湯気が昇っていた。

目を細めると、それが蜃気楼のように背後の景色を溶かしてゆらゆらと揺らめいた。

先ほどから、心臓は意味が分からないくらいに早鐘を打っていた。その大鍋を手に取り床にぶちまけようとした。

そんな自分に、フツと自嘲じみた笑みがこぼれた。

なにに対して・・・？何に対してこれほどまでに怒りを感じる？

そして、やはりその大鍋は床にぶちまけられることとなった。

ガシャーンと床に叩きつけられ、大鍋は中身を盛大にぶちまけられた。

飛び出した鍋の蓋がグワンワンワン・・・と弧を描いて床を回る。
大鍋からドロリと大量のリンゴジャムが床を汚す。

さきほどから鼻腔を甘くくすぐる好物の無残な姿に、
早鐘を打っていた心臓は、今では鳴りを潜め静かに痛んだ。

「・・・もう、いいだろう?」

少年が静かに言った。

リンゴジャムから立ち上る湯気がすーっと吸い込まれるように目線
の高さまで近づき、揺らぐ。

「・・・上出来、上出来」

ゆらりと湯気が大きく揺れ、男性の顔に変わった。

「”元帥”がお待ちかねだよ・・・首をながくしてね」

そう言っつて、湯気の男は首をながく伸ばさせて、そして消えた。

・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8652w/>

-DICE GAME-

2011年11月15日07時38分発行